
僕(変態) と君たち(変態) の相談部

めりめり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕（変態） と君たち（変態） の相談部

【Nコード】

N8683Y

【作者名】

めりめり

【あらすじ】

変態（作者）の変態（登場人物）による変態（読者）の為の物語。

ーエピローグー（前書き）

変態です

シモネタもちよいあります。

間違っても爽やかイケメンは出ません

「エピソード」

「横島君って、変態だよねえ？ちよつとそこを見込んで相談があるんだけど」

高校二年生になって一日目の僕よこしまはじめ横島宗は人生で、157回目の『変態』を言われた。

『変態』

僕はこの言葉のくくりに入れられる人間らしい。

あ、ちなみに僕が言っている『変態』は、幼虫が蛹へ移行するあれじゃなくて、特殊性癖的な人間を指す『変態』の方だ。ここ重要。と、まあ、話を戻して、僕が変態だという話だ。

あと、これ、言ってる何となく微妙に落ち込むが、まあ今は置いておこう。

――さて、まず僕が変態であるという理由だが、。

まあ、自分を客観的に見て、157回変態と言われてれば意識せざるを得ないだろう。

理由はそれだけ。

いや、もう少し理由があったりするけど、今は関係ない。

僕が言いたいのはそこではない。

僕が言いたいのは、その変態という部分が、なぜか知らんが役に立ったということだ。

具体的に言うと、同クラスの美少女から話しかけられるなんて主人公的イベントが、僕の変態性によって引き起こされた事についてだ。「横島君にちよつと来て欲しいところがあるんだあ」

記念すべき157回目の変態発言をした美少女は、いきなりそんなことを言っ、勝手に歩き始める。というか、この少女は出会って二言目に付いてこいなどと言って、付いてくる人間がいると思って

いるのだろうか？

——勿論僕は黙って付いていくけど。そもそも美少女の後ろを本人公認でついていけるなんてイベント、僕が見逃すわけじゃないじゃないか。

それに、彼女の制服の着こなし方。これを見て、彼女を黙って見送れる人間など存在するだろうか。

膝上まである黒いニーハイソックス。更にその数センチ上で揺れるスカート。その間に見える白い太腿。生肉！

上は明るい茶色のセーター。それを、彼女はサイズを合わせずに着ている。つまり、ダボダボ。これは！これは！

……お分かりいただけただろうか。

彼女の制服の着方が、一部の人に熱狂的支持をえる着方だということに。

その一部には勿論僕も含まれる。

「く…絶対領域。。。最高すぎる…ッ！」

僕はグッと拳を固める。だって、絶対領域だぞ！？興奮せずして何が男か！

しかし、こういうことを語ると

『えー、たった数センチの、しかも太腿に興奮してるわけ？』

などと言ってくる奴が往々にいるが、あいつらは盛大に勘違いしている。

まず一つとして、胸「おっぱい」や【倫理問題的に自主規制させてもらいます】が見えることがエロい訳じゃない。

胸「おっぱい」。この響きは確かにいい。いや、最高だ。

【倫理問題的に（略）】も確かに、良いときもある。

だが、例えば、美術館などに飾ってある裸婦画を見て興奮する人間などいるだろうか。

美術館で「えっろ！これ、えろ！ちょ、ここ、18禁だろ！」とか言ってる人間がいたら、通報するだろうか？

美術館で「ふむ……これは、エロイですね。この扇情的な形が、ま

た」とか言ってる人間がいたら通報するだろう？

では、なぜ裸に我々は興奮しないのか。

――答えは簡単。隠されていないからだ。

どんな部位も隠されず、おおっぴろげに堂々と見せつけられること
によって、僕たちはエロさを感じないのだ。その凜とした態度に、
美しいと感じるのだ。

そもそも、【倫理問題的（略）】と口など、あまり変わらないのに、
僕たちは口に何も感じない。いや、感じる人もいるけど（僕）、一
旦置いておく。

まあつまり、僕たちは、全部が見えるより、体の一部分が露出され
ているほうが興奮するのだ。

しかしここで勘違いされたくないのが、今僕が述べた理由が、うな
じ等の部位をエロく感じるのとは違うということだ。これについて
は、また違う機会にでも説明しよう。

「さ、着いたよ」

と、僕が熱弁していたら、ピタッと、目の前の生肉――ゲフンゲ
フン。絶対領域（さっき語った生肉の部分）が――ゲフンゲフン。
目の前を歩いていた彼女の足が止まった。ここは：廊下の内装的に、
校舎の旧館だろう。ふむ、結構歩いたみたいだ。

とりあえず僕は一旦（ここ重要）彼女の脚から目を外して、彼女が
案内してくれた場所が旧館のどこか確認する。

そして僕の目の前には、旧将棋部の部室で、

「相談：部？」

『相談部』という新しいプレートが掛けられた、古びた部屋があっ
た。

「失礼するっすー。部長、例の横島君を連れてきましたあ」

僕の前を先行していた、絶対少女（名前が分からないので、便宜的
にこの名前で呼ぶ）は、けだるそうな声で、目の前のドアに向かっ

て話しかける。

余談だが、ドアというものも良いものだと思う。
ドア。それはつまり、自らのプライベートを晒す穴。ドアのなかには入れるかどうかで、相手が自分をどう思っているのかが分かる、便利な器具だ。

ちなみに僕は、身内以外の家に上がった事は一度もない。

具体的な例を上げると、同級生が家に入れてくれなかった時に、「あれか、焦らしプレイかな」とか思って、ドアの前に二時間ほど立っていたら、その同級生の父が僕に千円を渡して「帰ってくれ」と懇願されたことがあったかな。

それ以来、誰かの家に行くということをやめた。
代わりにのぞき始めた。

閑話休題。

「あの、君。僕はなんでここに連れて来られたのかな？」

僕は、本当なら最初に聞くべきだったことを聞く。なんで聞いてなかったんだろう。ああ、絶対領域のせいかな。

彼女は、僕の問いを聞いて、

「ちよつと、この相談部に入部してもらいたくてね」と答えた。

――ああ、入部ね。なにげに僕スペック高いもんね。。。
って、入部！？

「入部だって！？そんな！？」

そんな重要なことを、この子は黙っていたのか！
それに、部活はキツイ！そうすると僕の、日課が！

「んー？横島君って帰宅部っしょ？」

そんな僕の内心も知らずに、彼女は聞いてくる。

首を横にかしげる仕草とか、本当可愛いなあ！！

――だけど、

「いや、そうだけど…。でも、放課後は暇じゃないと、僕は…」
「？」

彼女は疑問符を浮かべる。実際には見えないけど浮いてる。

「陸上部の練習が、、見れないじゃないか!!!!!!」

陽の光と、男子生徒の視線を集めてやまない、あの濃紺のスパッツが……見れなくなってしまおう!!

トラックを走り終わったときに頬を伝う、健康的な汗が!

走る前の、女子同士の柔軟が!

走ってる真っ最中の苦悶の表情も!

休憩時に、大ぴろげに広げられる、脚も!

部活などに勤しんでいたら、見れないじゃないか……ッ!!

僕の、唯一の、青春がッ!!

「…悪いけど、僕には…入部することは――」

ガチャッ。

僕が、絶対少女に入部できない旨を伝えようとした、その瞬間。

いきなり、相談部の（プレートが掛かっていたし、多分部室だろう）ドアが開いた。

そして、中から、

「ん。連れてきたか、三富士君」

ドアから出てきた彼女をあらわせる言葉は、『美しい』しか無かった。

ただ美しい。どうしようもなく、美しい。

凜とした顔つき。雪のように白い肌。全てを呑み込む漆黒の髪。小さい口から出た、透き通っているが芯のある声。etc…

全てが『美しい』だった。

しかし、それゆえか。

彼女はどこか虚しかった。

「あ……」

僕は声にならない声を上げて、彼女を見つめ続ける。

「いや、正確には、『目を離すことが出来なかった』
体が、僕の意識を無視して、彼女から目を話すことを赦さなかつた
のだ。」

そして、そんな不可解な現象を前に言葉も出ない僕に向かって、彼
女は言った。

「相談部へ、ようこそ」

にゅうぶ！(平仮名の方が可愛いだろう?) (前書き)

相談部。それは僕のハーレム!!

……じゃなくて、変態の巣窟

にゅうぶ！（平仮名の方が可愛いだろう？）

「私は、丘零《おかしづく》。役職は相談部部長。趣味は支配だ！」
『彼女』は自信に満ち溢れた顔で、高らかに言い切った。

相談部の中から出てきた『彼女』に、無理やり中に入れられ、僕は
イっちゃいますううううう！！

――じゃなくて、僕は困っていた。

なにせいきなり高らかに自己紹介をされたのだ。誰でも困るだろう。

「あ、私は、三富士文《みふじふみ》っす。趣味は百合っす」

そしてその後、絶対少女も自己紹介したが、なんというか印象に残りにくかった。

『彼女』のいきなりの自己紹介のせいで、僕は少し混乱してしまっ
たからだ。

僕はあそこまで堂々と自己紹介できた奴を一度も見たことなかった。
そして多分これからもないだろう。

そう思わせるほどに、『彼女』は堂々としていた。

まるで、自分に恥じるべきところなど、どこにもないといった感じ
で。

それが、『彼女』の美しさを更に加速させていた。

「横島氏、君の変態さを見込んで、お願いがある」

『彼女』は僕の混乱などお構いなしに話を進める。

僕の事情など知ったことではない、というように。

一否。僕の事情などどうでもいいのか。

『彼女』にとっては、自分が全てなのだ。

趣味が支配なんて馬鹿げた物も、それ故にだろう。

だから今、僕を支配しようと侵略中なのだ。

「…入部ですか？」

僕は混乱する頭を必死で抑えつけ、どうにか聞く。

「ん。そうだ。話が早いな」

彼女は満足げにうんうん、と頷く。その姿さえ様になるのだから、

『彼女』は本当に人の上に立つような人間なのだろう。

しかし、この圧倒的自信はどこから来るのだろうか。

「さて、じゃあ、この紙に名前を―」

彼女は自らのバッグから一枚の紙と、ペンを取り出し、渡してきた。

僕は返事してないんだけど……。

「あの、、僕、、陸上部の練習を…」

「ん？」

「いや、陸上部が…」

「ん？」

「スパッツだよ！！！！スパッツが見たいんだよ！！」

「ん？」

……圧殺された。。。イジメレベルだっただろ今の。

なんか、女王様って感じだなあ。

ハアハア。

「そんなに、スパッツが見たいのかい？」

僕が女王様という単語に悶えていると、『彼女』が口を開いた。

「みたいですよ！！男の夢ですよ！！いや、本当ならブルマがいいけど！」

ぐっと拳を固めて、僕は叫ぶ。

スパッツが見たくない男なんて、そんな男じゃない！

スパッツこそ、身近にある男の夢だ、と。

そう僕が熱弁すると、『彼女』は「ふむ」と声を漏らし、

スススッと、

僕の目の前で、

スカートをたくし上げていた。

「うおおおおおおおおお!!!!!!」

僕は思わず雄叫びをあげていた。

だって、スカートの中には、

「ブルマ……ッ!!」

ブルマが履いてあったのだ。

——た……たくし上げブルマ!!僕は今、新たな境地を開いてしまった!!

肉の食い込み、全てを飲み込む濃紺!そして普段は見えない内腿!!!!!!!

こんなことがあっていいのだろうか!?

「ど……どうだい?私のお願ひ、聞いてくれるかな?」

ここで聞こえる『彼女』の声。

ひ……卑怯な!!こんな事されたら、……!!

聞かない訳にはいかないじゃないか。

「入……部させてください」

こうして僕は相談部に入った。

そこが変態の巣窟とは、知らずに……。

にゅうぶ！(平仮名の方が可愛いだろう？)(後書き)

次回、メンバー紹介

日曜日ッ！—1—（前書き）

僕の日曜日を公開しちゃおうよ！

みんな、僕を見てっ。はあはあ

日曜日ッ！—1—

下腹部に尋常ではない重さを感じて、僕は目を覚ました。

「…あ？」

僕は寝惚け眼のまま、重さの正体を探る。

『ああ、この上に美少女が乗っているのかな？』

そんな期待を抱きながら。

「わ：私、召喚されはしえっ、馳せ参じました、あなたの使い魔です。なんなりとっ、ご、ご命令を：っ！！」とか

「あら、もう起きちゃったの？ふふ、仕方ない子ね。これから【倫理的問題によりカットさせていただきます】」とか
そんな展開になると、期待を抱いたよ。

——現実ほ、十キロのダンベルだったけどね。

なにこれ、おかしくない？なにゆえ僕はダンベルに起こされてるの？
なんで妹とか幼馴染に起こされてないの？

「あ、起きちゃった？」

僕がどうしようもない現実に打ちのめされていると、ベッドの横から、女の子の声が聞こえてきた。

うっひょーい。僕の朝の目覚めは、女の子と一緒にだーい。

とりあえず、声の主の女の子に挨拶をしなきゃね。

「おはよう、悠。今日も可愛いね」

「な：何言ってるの！？：恥兄のバカ」

「ん？なんかラブコメっぽい雰囲気だったのに、ただの一言でぶち壊された気がする」

「え？だって恥兄は端兄でしょ？」

「どっちも『はじにい』って呼ばれてるのに、貶されてる気がする

…」

「あはははは」

…おっと、つい愛しい愛しい悠との会話に夢中になってしまった。

ちゃんと紹介しないとね。

黒髪ショート、活発そうな女の子。高一だというのに全く育たない幼児体型は、常々僕の心を奪う。

さて、そんな少女がなぜ僕の朝に立ち会っているのかというと、それはもう聞いたら発狂しそうなくらい羨ましい理由である。

…まあ、つまり、彼女は僕の家に住みこんでいるのだ。

僕の従姉妹として。

うふふふふ。どうだい？羨ましくて発狂しただろう？

「はじ兄、、なんで一人で笑ってるの？」

「いや、悠みたいなお可愛い子が、同居してると思うと、なんだか優越感が沸き起こってね」

「……………ばーか」

がちやつ、と僕の部屋のドアを勢いよく開けて、彼女は出ていった。僕はとりあえずダンベルを床に置いて、ベッドから出る。

そして、伸びをしながら考える。

——悠はなにに僕の部屋に來たんだろう？

「母さん、僕の分の朝飯は…？」

一階に降りてダイニングに向かうと、その食卓の上には、真っ白な皿とパンが、三枚しか置かれてなかった。

両親と悠の分だろう。うん、そこまではいい。

で、僕の分は？

いやいやいや、さすがに実の息子である僕の、朝飯がないなんてことはないだろう。

で、僕の分は？

「……………」

母さんは何も答えない。

え…？なにこの沈黙。真面目に僕の朝飯ないの？

「……………」

鋭い視線をぶつけてみるが、母さんは、やはりなんの反応も示さない。

ちよっと、いい加減にしてくれ？え？ないの？

そんな僕らの雰囲気を感じてか、悠は、

「あの、はじ兄、私の半分あげるよ」

「あら、悠ちゃん。遠慮しないで。アレに優しくすると、すぐつけあがって面倒よ」

「おい！！今、本音出ただろ！！アレってなんだよ！僕息子！！」
くそ、この母親。血のつながった息子をアレ呼ばわりだなんて、あんまりだ！

「うるさいわ、横島さん」

「ここにいる人、ほとんど横島さん！！そこまでして僕を息子と認めたくないの！？」

「最近の子はヒステリックでいけない。もっと落ち着きなさい」

「誰のせいだよ！！」

「……あ、そうだ。あなた、海外に行ってくるのは、どう？今のうちに世界を見るときなさい」

「そんなに僕を家から追い出したいの！？」

「……………」

「無言で目をそらすなあああ！！」

この親！！児童相談所に逃げ込んでやる！児童最高ーーーー！！
しかし、朝飯について嘆いても仕方がないので、僕は母さん（？）から500円を奪い取って、漁サンを履いて外に出る。

僕は基本的にポジティブなのだ。

「あの、馬鹿親！！僕に悠を譲ってください！！」

我が自宅に向かって大声で叫ぶ。

こうでもしないと、やってられない！

僕は、怒りやら、悠への劣情やらを原動力に、自転車を漕ぎ出す。

ひたすら夢中に漕いだ。

——だから気付かなかった。500円として渡されていた筈のコインが、どこの国かよく分からない通貨だったことに。

……ばかやろう!!

日曜日っ！―2―

日本円の五百円を取りに家に帰ると、リビングでは両親と悠が話していた。どうやら僕の話らしい。

「あの、宗の事なんだけど…」

声質的に母さんかな？これは。

僕はリビングの扉に掛けていた手を外し、代わりに耳を寄せる。昔、悠の部屋を盗聴—もとい、兄として（従兄弟として？）悠の生活管理する時に用いた手段だ。

機械を買うより断然安いし、扉越しとはいえ、生で聞こえるのが強みだ。…だが、親に見つかりと死にたくなるし、殺されるから最近止めた。

「宗か…。アレは、、、」

お次は父さんの声だ。

なんだ？この両親は2人とも僕をアレ呼ばわりしてるのか。

「はじ兄がどうかしたの？」

「ああ、悠。……変に思わないか、宗の事」

「変？」

「変、態とかさ…」

ちよっ、直球すぎるよ、父さん！！

なんで肉親にまで変態呼ばわりされないといけないんだ！！

「うん、そうだね」

って、悠！？あっさりすぎない！？

「やっぱり悠も、そう思ってるわよね！！…どうしようかしら」

「アレには彼女とか出来るだろうか…」

「はじ兄に、彼女？…できないよ！！…うん」

悠がさっきから僕にキツイのは、なぜなんだろうか。実は嫌われてるんだろうか、僕。

「どうにか治らないだろうか、アレ」

僕は病気じゃないよ、父さん!!

「：無理よ。保育園の頃から変態だったもの」

保育士の胸を見ようとするのは、当たり前だろ？それを言動に表したかどうかだよね。

結局皆変態だよね。

「というか、いい加減に僕入らないと、明日から顔あわせにくくなっちゃう…」

—こくも変態変態言われると、ね。

僕は扉から耳を離して、リビングに入る。

その時の三人の視線が、妙に身に染みたことは、言うまでもない。

「はじ兄、入るよー？」

コンコン、というノックの音と共に悠が部屋に入ってきた。

こういうのは、ちゃんと返事を待ってから、入ってくるべきだと思う。まあ、どうでもいいことなんだけど。

「んー？どうかした？」

「いやさ、昨日、帰り一緒じゃなかったじゃない？」

—ああ、そうそう。僕と悠は中学の時から、一緒に登下校してるのだ。

まあ、仲いいし（重要）一緒の家だし（重要）学校も、学年が違うだけで同じだし（重要）

「ああ…うん」

だが、昨日は『相談部』云々で、帰る時間帯がずれてしまったわけだ。

いや、しかしだな!!生ブルマを見るだなんてイベント、見逃せるわけじゃないか!!

「ブル……部活だったんだ」

先程、変態変態言われていたので、ブルマとは言わないが、すると悠は、

「はじ兄が部活…？うー」

と、唸って、その姿が可愛い！！この仕草だけで、アルバム一冊はいける！！

「はじ兄…、部活ってなに？」

「相談部って知ってる？」

悠の問いに、僕が『相談部』と言った途端、彼女は納得したように首肯した。

え、なにその反応？

「悠…？相談部って有名なの？」

恐る恐る聞いてみる。

なにせ僕は、一回も聞いたことない部活だったから、実際どんなところか知らないのだ。

よくそんなところ入ったな、とか言わないで欲しい。

――そして彼女は、僕の問いに、

「相談部はね。別名、変態部って言われてて、変態の隔離病棟みたいなところなんだ」

僕は初めて、ブルマを恨んだ。

部員―1―

「おお、きたか!! 横島氏」

放課後、相談部に向かうと、椅子に座っていた部長おかしく一丘雫が満面の笑みで僕を出迎えてくれた。変態病棟とか言われているのを忘れてしまうくらい美しかった。

「はい。部員ですしね」

「いや、ね。入部した人間が、そのまま入部し続ける事は珍しいんだ」

へえ。意外だなあ。こんなに美人の部長がいるのに。

「…皆、部員を紹介すると、次の日からこなくなるんだ。。なぜだ」

ガツクリと首を落とす部長。

多分それで来なくなった人達が、変態部とか吹聴したんだろうな。

…そうだ、ここ『変態部』なんだ。

「だがっ!!」

いきなりバツ、と部長が立ち上がる。

そして、ガシッと腕を掴まれた! うおおおおおおお!!

「横島氏! 君ならこの相談部の、立派な一員になると、私は信じてるよ!」

「はい、喜んで!!」

「おお、そうか! では、相談部の部員を紹介しよう!」

彼女は荒々しく、掴んだ僕の腕を振る。

― 僕って軽々しく返事しちゃうなあ。

でも、部長のこんなに無邪気な姿が見れたから、良かったかな。うん。

「さて、まず、君と同学年の、三富士だ」

彼女は、部室に設置されているソファの前にやってくる。

そのソファの上には、一昨日僕をここまで案内してくれたあの娘がいた。

「三富士氏じゃないんですか？」

「いや、私は女性には氏をつけないんだ」

そんなどうでもいい事を部長と話していると、ソファに寝ていた彼女は目を覚ました。

「：ーん。どうかしたんすか？」

彼女は「目」だけをこちらに向けて、口を開いた。

だるそうだなあ。

あと、制服のまま寝ると、いい案配で制服が着崩れて、色気を感じるなあ。

緩いシャツの襟口から見える、鎖骨。

さらに、そこに開いた襟口と素肌との洞窟。その先の見えない暗闇を、突き進んでしまいたい衝動が湧き出るが、必死に抑える。

そして、そこから視線を下にずらして、スカート。

これがまたいい味を出している。

少し捲れ上がったその布の下には、皆のオアシス、そう、アレがある。

それが見えるか見えないかのギリギリの位置をキープし、そこから目を外すのは至難の技だ。

また、スカートが捲れ上がることによって、普段より大きい面積の太ももを曝け出すことになる。

つまり、ニーハイと太腿の、黒と白のコントラストだ。

このキツチリとした境目が、さらに僕の心を掴んで離さない。

――だが、まだそれだけではない。

そう、乱れた髪と、首筋を伝う珠の汗だ。

ここまでコスチュームや身体ばかり注目したが、この二つの要素を

除いたら、それはガクンと輝きを失っただろう。
乱れた髪、そして汗。この二つが演出するもの。それは身体の火照りだ。

この火照りが加わることによって魅力が段違いに上がる。

最後に、彼女特有の気だるさも相まって、その光景は

『至福』

この二文字が一否、この二文字こそ、相応しい。

「三富士さん。グッジョブ…ッ！」

僕は今、猛烈に感動している！

「は、はあ…？」

「ん？横島氏？大丈夫かい？」

二人揃って、奇異の目で僕を見る。

「あ…うん。大丈夫です」

僕の様子に、彼女らはさらに首をかしげたが、追及はしてこなかった。

「では、紹介しよう。彼女は三富士文。みふじふみ君と同じ年で、7月14日生まれ。で、百合だ」

「そっすねー」

「後は、三富士。少し喋れ」

「…うーす」

部長と三富士さんは、そんなやりとりをして、三富士さんが遂に立った。

…：…ばかやろう。

「えーと、三富士文。百合が好きで、経験人数は5人。まだ処女っす。よろしくっす」

三富士さんは、僕に一礼して、またそそくさとソファに寝転んだ。ここまで流れるようにソファに寝転ぶ事ができるのは、この学校で多分、三富士さんだけだろう。

何年間この動作をしてきたのか、最早それは達人の域であった。

…さて、本題に入ろう。

「百合：だと！？そして、出会って二日目の奴に処女宣告だと！？」
重要だ。

この少女はなにを考えているんだ！

「んー？今時、同性愛者は珍しくないっすよ？」

「そういう問題じゃないよ！！というか、そこじゃないよ！」

「どこっすか？処女っすか？」

「そこだよ！！三富士さん！いきなりそんなこと言ったら、危ないでしょうが！！」

「…なにがつすか？落ち着きましょうよ？」

「落ち着けないよ！！ほかの男子に、そんなこと言ったら勘違いされるからね！？」

「勘違いっすか」

「こいつ、俺のこと誘ってんじゃねえか？的な勘違いだよ！」

「でも私、女の子にしか興味ないし…」

「それで傷つく人もいるんだよ！！これ以上ない『勘違い乙』だよ！立ち直れないよ！」

「…何情報っすかぁ」

「ソースは僕だよ！！」

小学校の頃、「優しいね」に騙されて、告白した僕だよ！馬鹿！僕の馬鹿！

「はぁ…。分かりました。そこまで言うなら、以後気を付けます…」

三富士さんは、納得いかない顔で言って、それを最後に意識をブラックアウトさせた。

うむ…。大丈夫かな…

そもそも、僕の前でこんなに無防備な姿を晒してる時点で、終わ리だと思っただが…。

――すると、僕の苦悩を読み取ったのか、会長が、

「大丈夫さ。もし大丈夫じゃなくとも、それは彼女の問題だ」

「でも」

僕は食い下がってしまう。

だが、会長は自らの言葉で、僕の言葉を断ち切った。

「……君は『変態』なのに、優しいんだね」

小学校を思い出して、死にたくなった。

部員一2一（前書き）

天は人の上に人をつくらず、人の下に人をつくらず――

しかし、僕的には、人の下に人を作って欲しかった訳です。
だって、下からパンツが見えるよね。合法的パンモロだよね。

部員一2一

「さて次の部員だが」

部長は部室の中にある、カーテンで仕切られた部屋へ入っていく。なにげに広いんだよね、この部室。

「さあ、紹介しよう」

シャツと開けられたカーテンの内には、ソファが二個と、背の低いテーブルが一つ。

そして、僕から見て、左側のソファには、黒髪の笑みを顔に貼り付けたような男が一人、もう片方には、茶髪の背の小さな女の子一人と、ガタイのいい男が座り、何やらトランプをしていた。

その三人は、部長の声に顔を上げ、僕をまじまじと見る。

「そいつは？」

少しして、代表したように、三人内のガタイのいい男が、僕を顎で指して、部長に聞く。

彫りの濃い顔で、どちらかというところ、鳶職でもやってそうな男だった。

「ああ、新しく入部した横島氏だ。……横島氏、こいつが三年の不二だ」

「へえ、こんなところによく入部したな。……よろしくな、俺は不二正義だ」

不二先輩は手を差し出してくる。

僕はその手を握り返して、笑顔を返した。

「――なんだ、ちゃんとした人もいるんじゃないか。」

「はい、よろしくお願ひします。僕は横島宗です」

いや、良かった。変態だらけじゃないじゃないか。

やっぱ、どこにでも良心っていうのはあるものだなあ。

——と、思っていた矢先、それが起きた。

「ねえねえ、不二君。君負けちゃうよ」

いきなり、不二先輩とは反対側のソファに一人で座っている、黒髪の男が口を開いた。

そうか、そういえばランプしてる途中で僕たちが入ってきたのか。——テーブルの上に散らばっているカードを見る限り、やってるのは大富豪らしい。

そうそう、ちなみにこの『大富豪』って言い方、地方とかによって違うらしいよね。

『大貧民』っていう言い方のやつね。

でも、大貧民だと、こう、

「お金がないから……。私……。これは、仕方ないことなんだ……。だって私、女（略）」

っていう妄想につながっちゃって、不謹慎だから、『大貧民』って言えないんだよね。

…あれ、でも『大富豪』も

「げへへ、お金がない？…ふん仕方ないな、じゃあ体で払ってもらおうか!!」

に、なっちゃって駄目だね。てへ。

「ほらほら、早く出そうよ」

黒髪の男は、更に急かす。

しかし、、この男はなんというか不気味だった。

なんでも知っているような余裕と、自分のことを何も悟らせない笑顔を携えたこの男は。

不気味だった。

「……部長。あの黒髪の人」

あまりに不気味だったので、僕は部長に耳打ちする。

決して、自分の口を部長の耳に近づけたかったとかじゃない。
あ、部長の髪、いい匂いするう。

「ん？ ああ、黒井の事か。あとで紹介するから、ちょっと待て」
部長はニヤニヤしながら、黒髪と不二先輩を見ている。

ここまでニヤニヤが様になる人は、多分この世にいないだろう。
そう思わせるニヤニヤだった。

だから僕も部長を真似て、ニヤニヤする。別に、部長の顔を近くで
見ていることに、ニヤニヤしている訳じゃない。断じて違う。

ニヤニヤ。

——と、僕がニヤニヤしていたら、

へええええん！ しん！！

トランプをしている筈の場所から、奇声が聞こえてきた。

僕は先輩から目を外して、声の上がった方を見る。

そこには——！！

「な……！？」

僕は思わず腰を抜かす。

だっしょうがないじゃないか。

目の前に、穴があいた紙袋を被った、ガタイのいい男がいたんだか
ら。

「どうだい？面白いだろう？不二は」

部長は未だにニヤニヤしながら僕に言ってくる。

：ニヤニヤしてたのは、僕のこの姿が見たかったからか。

「あれは、不二先輩なんですか…？」

あれが不二先輩だというのか。

人は紙袋一つであんなにも変われるものなのか。

あそこまで、

狂えるのか。

「まあ、見てろ。奴の凄いところはここからさ」

部長は愉快で堪らないという顔で、不二先輩だったアレを見る。

僕も、言われたとおりに目を向ける。

そこには、普通では有り得ない光景が広がっていた。

まさに、変態部の名にふさわしい光景が（やっているのは大富豪）。

「ふッ！！どうだあ？カッコイイダロ？」

「やっぱ、不二君はそうじゃないと面白くないよね…ッ！！」

「……………」

カードを持つ三者は、互いに睨みあう。

だが、それも一瞬。

一一動き出す。

「はっ！」

一番の異常が。

彼は、右手の人差し指、中指、薬指の間に一枚ずつ挟み、テーブルに投げつける。

それは明らかに『遊び』ではなかった。

「……………」

次に、小さい女の子が、ゆっくり、カードを場に出す。

手札の枚数を見る限り、彼女が一番少ない。

だが、他の二人からは、圧倒的な『自信』しか感じなかった。

「ははっ。じゃあ、いかせてもらおうよ」

黒髪の少年は、自らの出したカードの効果で、場にあったカードを横へ流す。

そして、イカサマしたとしか思えない程に揃った、シークエンス（同じマークで、連続に連なった数字の三枚組以上のカードの集まり。階段）を場に出す。

場にいる人間は、その少年の顔を睨むが、少年の笑顔は崩れない。

少年のカードはあと一枚。

少年は自らの勝ちを確信した。皆、少年が勝つと思った。

——ただ一人を除いて。

「ふふん。ふはははは！！甘い、甘いぞ！！」

「！？」

黒髪の少年は、笑顔を崩さないまま、……確かに動揺していた。

茶色い仮面を被った異常者は、笑みという仮面を被る少年を、押し込んだ。

彼は、自らの手札を全て場に出す。

出されたのは、6枚揃ったシークエンス。

しかし、そのカードの束は、

「……俺が出したシークエンスと、同じ柄じゃないか！！」

黒髪の少年は激昂する。

勿論、笑みを貼り付けたまま。

「……どうすんの？不二君。これは明白なイカサマじゃないか」

少年は一瞬で落ち着きを取り戻し、冷静に問題点を突く。

一否、問題と言える事ですらない。これは、どうしようもないほどに、明らかなイカサマだ。普通に考えて、逃げ道などない。

「ふう。いいかい？黒井クン」

だが、異常者に普通は通じない。

彼は、自らのイカサマに、むしろ嬉々とした態度で、言った。

「勝てば、正義だ」

「なに言ってるのさ、不二君。君はここでイカサマ負けじゃないか
そのとおり。」

異常者――不二正義はイカサマとも呼べない暴挙をした挙句、自分の勝ちだと言い始めたのだ。
あまりに常軌を逸している。

それでは、ルールも何もない。

否、彼にはそれが普通なのだろうか。

「違う違う。俺は最初に確認しただろう？」

彼は言いながら、場に出ているカードを指でさして、

「このトランプを使う、と!!」

高らかに言い放った。

――異常者の言葉を聞いて、少年は停止した。

皆一少なくとも僕は一停止した。

そして、数秒。

後、少年は負けを認めた様に、自分の手札を場に捨てた。

「俺の負けかな。うん」

黒髪の少年は、ソファに横になる。

僕は、その一部始終を見届けてから、部長に話しかけた。

「……あの、不二さんって、誰なんですか？」

「はは。誰、か。そうだね。今の彼は、不二正義であって、不二正義じゃない」

「……」

「これが面白いものでね!今の彼は、『正義』なんだってさ」

部長は、活き活きした目で、ソファの上に立ち上がっている彼を見る。

あれが、正義だって？あの、薄気味悪い異常者が？

「彼にとって、正義は勝つんじゃない。勝ってこそ正義なんだ。」

――だから平気でイカサマもする」

「いくら悪と罵られようと、勝ち続ける限り、それは正義だそうだ」

「くっくく。全く、本当にカッコイイじゃないか彼は！」

部長は腹を抱えて笑う。

部長はかっこいいと言う。

勝つことだけに価値を見出す、あの異常者を。

勝ちに何よりも妄執する彼を。

かっこいい、と。

「…は、はは。なんですか、あれ」

「かっこよすぎるじゃないですか」

部長は嬉しそうに口を歪め、自慢げに言い放った。

「だろう？我が部の部員は皆変態で、かっこいいんだ」

部員一二人（後書き）

全然ラブコメになる兆しがねえ！！

無理やりラブコメにする気はないけど！

ナチュラルにラブコメにしたい！

というか、今回、ついにコメディじゃない！

部員一三一（前書き）

やっと気づいたんだけど、エピローグって、終わった方だった。

一話目のプロローグだった……。

作者ッ！！

部員一三一

「うむ。不二の紹介は終わったから、その二人を紹介しようか」
部長は、先程までトランプをしていた黒髪と、ロリ……背の低い女の子を目で見据えながら言った。

「こっちの男は黒井陽くろいよう。なぜか色々知ってる、この部の中で一番恐い奴だ」

部長がそう言うのと、黒井と呼ばれた少年は、口を尖らせ、反論する。
ニヤニヤしてるところと相まって、何となく苛ついた。

「酷いなあ、恐いだなんて。印象が悪くなっちゃうじゃないか」

「貴様の印象など、いつでもどこでも最悪だろう？」

「……っ。そんなことないさ。よろしくね、横島宗くん」
スツと手を差し伸べられる。

僕はそれを華麗に無視して、

「無視、酷くない！？仮にも初対面だよ！？」

もう一人のロリ……っロリっ娘に目を移す。

「部長、こちらの方は？」

「ねえ、酷くない？俺、自己紹介すらしてないよ？」

「ああ、そいつは夏貝南かがいみなみ。背が小さいのが特徴だ」

いや、見れば分かるけどね。

136くらいかな？

「……夏貝南。南でいい。……よろしく、横島」

そんな、いきなり名前呼びなんて、馴れ馴れしいですよ。よろしく
お願いします、夏貝先輩。

「ええ。本当によろしくお願いします、……南先輩。僕の娘になって
ください」

「……？」

はっ！？建て前と本音が逆になってしまった。
とりあえず、冗談として誤魔化さないと。

あとキョトンとした先輩可愛い」

「……………」

ってあれー！？いつから僕喋ってたんだろう？

「んんっ。一旦落ち着け、横島氏」

「落ち着けないですよ！！可愛いじゃないですか！！」

「…なにを言っているんだ、君は…？」

「ああ、可愛い！！お持ち帰りしたい！！お医者さんごっこしたい！！」

「こいつ、大丈夫か？おい…」

紙袋を外した、不二先輩が、若干引いた目で僕を見ってくる。

いや、あなたの方が変態だからね！？なんで、そんな目ができるの！？

「ああ、不二…。こいつは、私達が初めて出会う形の、変態だからな」

「なに言ってるんですか、部長！！あんまり変態変態言うと、髪食べますよ！！食べさせて下さい！！」

部長は身震いして、自分の髪を大事そうに抱え、僕から離れた。

ふっ！！あまり僕を嘗めるな。

そんな距離、僕にとっては無いに等しい！！

さあ、地面を蹴って！！

先輩の髪へ、いざダイブ！！

「不二！！やれ！！私を守るのが、貴様の役目だろ！！」

「…合点承知した。悪く思うな、我が後輩」

そう言いながら、不二先輩が部長の前に立つ。

チッ、邪魔だ！どけ！！

「不二先輩…」

「吹っ飛べ」

台詞の途中で、頬に大きな拳の感触。

そして、遠ざかる不二先輩。

やった、さすが先輩。話が分かる。

それにしては、左頬が死ぬほど痛いし、部長も遠ざかって……え、部長も？

ーードサッ。

鈍い音と共に、更なる痛みが僕を襲う。

え、どういう状況？

頬が痛くて、背中痛くて、不二先輩遠くて、吹っ飛べって、、え？
僕殴られたの？

「…あがあああああ！？」

あああああ。

痛い痛い痛い痛い痛い痛い。

痛い。

「へえ、一発でトばなかったのか。不二、貴様、手加減したのか？」

「…したには、したが。なんで起きてるんだ、こいつ」

部長と不二先輩が、妙に落ち着いたトーンで話している。

なに悠長な事言ってるんだ。

早く。

「ふむ。。。まあいい。次は、トばせ」

逃げないと。

僕が。

ドスッ。

不二先輩の足で、僕の意識は黒く染まる。

ー一どうせなら、部長に踏まれて、消えたかった。

目を開けると、そこは白い部屋だった。
鼻を突く、消毒液の香りから察するに、どうやらここは保健室らし

い。

「…っ痛」

身体を起こそうとすると、頭に激痛が走った。

――ああ…久しぶりに脳震盪起こしたな。

僕はしみじみと、そんなことを思う。

昔は、色んな女の子にちょっかい出してたからなあ。その度に、色んな男に殴られてきたから、受け身のとり方と、逃走ばかり上手くなって。

具体的には、この学校に来てから、一年間で100回位殴られてる。

「……あ、起きた」

と、横から南先輩の声。

「つてえええい！！…南先輩どうしてここに？」

「……つてーい？」

「あ、いや、驚いただけです」

「…そう」

先輩は独特のリズムで会話する。

うむ。僕の予想じゃ、先輩は無口系無垢クーデレだと思うんだけど、多分そうだろうね。

あと、僕個人としてはクーデレ大好きです。

いや、可愛い子は皆大好きです。

「……私、見守りの命令、貰ったから」

「命令で…。部長ですか？」

僕の質問に、彼女はコクンと頷く。

こういう仕草は本当可愛いよね。

男女問わず、可愛ければ正義だよな。

これを富士先輩に言ったら、殺されるだろうけど。

「……じゃあ、私はここで」

「あ、ちょっと待って」

立ち上がった彼女の腕をつかむ。

保健室に女の子と二人つきりなんて状況、もう一生来ないかもしれ

ないんだ。せめてもう少し話させて。

「……あ」

「あ……すいません。いきなり。痛かったですか」
僕は手を離す。

いやあ、僕としたことが、焦りすぎてしまったようだ。反省。
ただ、こう、小さい声と少しだけビクッて体になるのって、傍目から見ると、なんともそそるなあ。

それが南先輩の、幼女体型と相まって。

もう、僕の【倫理的問題により伏せさせていただきます】はスパークキング！！

……そんなに引かないでくれ。冗談だから。

僕は、彼女の腕から離れた掌を、凝視する。
すげえ舐めたい。

「……いや、大丈夫」

その当の彼女は、軽く朱色に染まった頬のまま、僕が寝ているベッドの横にある丸いすに座り直した。

――しかし、腕を服ごしに掴まれたくらいで赤面って。

南先輩って男苦手なのかな。

「南先輩って、男苦手なんですか？」

でも、だからって聞いちゃいけなかったんだ。

自分の心の中で、男苦手と、勝手に思っとけばよかったんだ。

目の前の小さな女の子も、相談部の一員なんだから。

そこを忘れてはいけなかったんだ。

「……別に。そこじゃなくて」

彼女は首を横に振る。

そして、その小さい口で、

「……私、ドMだから」

――帰り道。

僕はとりあえず安静ということで、部長たちに家に帰らされた。もう時刻は五時だというのに、外は明るくて、夕焼けにすら至っていない。

僕の家までの帰り道は、川沿いの道を歩いていくもので、夕焼けを見れると、すごく綺麗だ。

……だが、その分カップルを、、否、カップルのキスシーンをよく見ることになるので、ものすごく切なくなる。一度だけ「交ぜて」と言ったら、殴られた事もあるし、余計切ない。

河の橋の下とか、結構いい響きの所だけど、「交ぜて」と言ったら殴られた。

「南先輩……」

僕は思わず口に出す。

あの小さくて、クールで、茶髪で、ショートカットで、制服がダボダボで、（中略）な彼女が。

ドM、だというのだ。

具体的には、さっきの腕をつかんで赤面したのは、興奮したからで、、そうそう、つい先程までやっていた大富豪は、わざと勝って、憎しみの目で見られたかったからやっていたらしい。そこまで行ったら、最早Mかどうか分からない。

「まだ僕は南先輩と、不二先輩の変態ぶりしか見てないんだよな……」
あんな異常者達に、負けず劣らない変態達なんだもんな、ほかの人

も。
部長や、三富士、黒井さんも。

「ん？あれ」

自分の入った部活を思いながら、僕は違和感に気づく。

――相談部の人達は、皆変態……。

つまり

「僕も、あんな変態たちと同じくらい、変態だということのか……!?!?」
いつもの帰り道で、僕はまた、切なくなった。

部員一三一（後書き）

さくしゃのあとがき

プロログ問題、すみませんでした。

いやでも、最近、「終わってから始まる物語」みたいな流行ってるじゃないですか。

その的なノリですよ

すみませんでした

依頼（前書き）

一回書いたものの全部消えた……
僕の色々な頑張りが、サブタイ入ってませんの前に、水泡に消えた。
僕のでばんがああああああ！！
作者ああああああ！！

依頼

吃驚。

これが読めるだろうか？

読めたとしても、書けるだろうか？

このように日本語には、漢字にしても意味のないように感じる物が多い気がする。

それだったら、おっぱいを漢字にしてほしい。漢字の方が堂々と書ける。

乙胸とか良いと思う。形的に。

そうすれば、『慎ましいお胸』が『いい乙胸』と書ける。いいですよね。

閑話休題。

吃驚の話だが、これ、ビックリと読む。

びっくりと読む。

たった6画で終わる言葉が、28画だよ。「夏休み、暇なんで作っ
たよ」臭がするよね。

と、まあ、そこはどうでもいい。

大事なのは、僕が何故『吃驚』の話をし始めたのかの理由だ。

それは、もう至極簡単。もう、ツンデレがデれるくらい簡単。

赤信号になりかけの横断歩道をわたるほどに簡単。

そう、長々と書いたが、ただいま僕は、

吃驚しているのだ。

哑然でも良い。

そんなことを言うと、つらつらとびっくりについて語ったのが無駄になるが、正しい物は仕方がない。

とりあえず僕は吃驚していたのだ。

それは、ガリガリ君のアタリが出たように。

それは、二千円札がお釣りで返って来たように。

それは、告白された時のように。

それが、罰ゲームだった時のように。

畜生。

まあ、僕の黒歴史は置いといて、吃驚吃驚。

こうも長く言っているのは、その分驚いているからだ。

つまり、具体的に言っていると、

相談部に、『相談者』がやって来た。

僕が相談部に入って、一週間が立ったある日のこと。

僕の見つけた、三富士の寝姿観察スポットで、いつも通り、三富士の曲線美を確認し続けていると、『彼女』はやって来た。

「失礼します」

一言そう言ってから、つかつかと中に入って来て、そのままカーテンで仕切られた部屋に入った。

部員では、ないと思うんだけど…誰だろう。

僕は、観察スポットに配置されてるm y椅子を畳んで、カーテンの仕切りの部屋の中を覗く。

覗く作業とかは、なれてるからね、僕。

「……ですから、よろしくお願いします」

うん？よく聞こえない。

「ああ。承った。また後日連絡しよう」

あ、これは部長の声だ。

と、シャツとカーテンが開かれる。

その中から出てきた女の子に、僕はぶつかった。

「ぐぺ！」

僕が奇妙な声を上げながら倒れると、ぶつかってきた相手は、

「……横島ッ！聞いてたのか！！」

「な……？なんのこと？」

「惚けるな……クソ、覗き見なんてつくづく最低だな、お前は！」
え……ちよ、初対面の子にここまで言われる普通？

まあ、言われるのが僕クオリティなんだけど。

「あの、何が何やら？僕も聞こえなかったというか」

「話しかけるな、変態！」

「……何もそこまで言うことないだろ！君とは初対面じゃないか！」

「ふん、お前の噂は聞いている。色んな女子に手を出しやがって！
触るな変態」

「手は出してない！僕はノータッチだ！あと変態いうな！」

「変態は変態だろう？そもそも、同じクラスの人間を初対面呼ばわりなのが、女子に見境のない証拠だ！」

「うぐ……でも、君には話しかけたことないし！」

「変態なら、いつ襲ってきてもおかしくないからな。私はもう帰る。
そこをどけ」

「だから変態じゃない！いや、変態なのは認めるが、僕のことは、『変態さん』と呼べ！そっちの方がグっとくる！」

「先輩はどうしようもなく変態ですね」と

「先輩はどうしようもなく変態さんなんですネ」だったら、
後者のほうが可愛いだろう？

「どけ！！邪魔だ」

「嫌だ！僕をどかせたいなら、もっとSにならなきゃ！」

「黙れ変態！！！」

腹に、彼女の足が入る。

あ、、これやばい。吐く。

僕が呻きながら倒れ込むと、彼女は僕を飛び越えて、部室から出ていった。

「なんで、こんなに嫌われてるの、僕……」

床をのたうち回りながら、僕は小さく泣いた。

「さて、横島氏も治ったことだし、依頼の説明をしよう」

部長は、いつも三富士が寝ているソファに座り、そう言った。

「依頼って、相談のことですか？」

「ああ。相談部という名前だが、実質ここはなんでも屋だからな」
部長はめんどくさそうに、僕に説明し始める。

相談部のシステムを。

「まあ、簡単に言うと、相談を遂行しないと、私の帝国であるここ
が奪われてしまうのだ」

……説明してくれなかった。

いや、まあ、いいけどね。

「でえ、今回の相談ってなんなんすかあ？」

三富士がいつも通りの、怠そうな声で部長に聞く。

妙に慣れた口調だけど……あ、そうか、三富士は一年生の頃から相談部なのか。

——三富士の問いに、部長は不敵に口角をつり上げ、

「恋愛相談だ」

「無理だろ!!」

依頼（後書き）

さくしゃのあとがき

前書きで言われたとおり、一回書いた第8話のこれが、「サブタイトルが入力されていません」に奪われました。

もうやる気を亡くして、結局、短く短縮させたのが、今回の話です。なんて、かわいそうな私。

さて、今回の話の言い訳はすんだところで、クリスマス近いですよね。

私は去ることながら一人です。

だから、「この後書きを見た人は、メッセージを送らないと呪われる」

みたいな、不幸の手紙のような、事をします。

まあ、送っても、「俺（私）何やってんだろ…」と不幸になります。すいません。嘘です。

えーと、今回は私聞きたいことがありまして、この作品R-15タグ付けるべきですかね？
どうでしょう？

でも、R-15指定ってすると、それだけで何か、中身が激しい物かと思われそうで…。
どうでしょう？

依頼一 2 一（前書き）

最近、家族のとう違ふ洗濯かごに、僕の服が入ってるよ。

なんで、一家全員僕に思春期女子の父への対応してるの？ 幼児退行プレイなの？ 悠は僕の娘になりたいの？

依頼—2—

「依頼の内容はな」

部長はつらつらと話し始める。

いや、待って。

ここの変態共に、恋愛なんて、分かるはずないでしょ？

「…ということだ」

部長は、小さく息をつく。結構喋ってたもんなあ。

それで、彼女の話をまとめると。

先程の女の子は、こしじきようし恋路京子。

僕と同じ2年生で、クラスも同じ。

凜とした雰囲気を持つ、可愛い娘だ。僕の予想じゃ、ツンデレ。

後ろで髪を纏めていて、制服の襟口からうなじを覗かせる、割と巨乳な娘。

うなじ、いいよね。うなじ、最高だよね。

で、相談内容は、恋愛相談。

何でも、1年生の頃から好きで、最近は見かけるだけでドキドキが止まらなくなるそうさ。

それは、病気です。病院行きなさい。

でも、本人が言うところによると、恋の病だそうさ。病気なら、もちっと弱々しいところを見せて欲しかった。絶対可愛いのに。

そして、その恋の病が、恋路さんの胸を締め付けて、苦しいそうです。

どうにかしてください。

みたいな相談。ちなみに好きな人っていうのは同学年の錦^{にしき}萍^{おり}君。

文武両道、容姿端麗。皆から好かれ、優しく。芯のある人間らしい。ちなみに、錦萍の対義語は横島宗らしい。

らしいらしい。らしいを使わないと確定になっちゃうからね。

「というか、あんなでかい乙胸（前話参照）のどこが締め付けられているんだ。ブラのカップの問題なんじゃないかな？」

「横島君は、今日も変わらず変態ですねぇ」

三富士が怠そうな声を上げる。怠いなら、わざわざ変態言わないで欲しい。

「とりあえず、今は黒井に、錦萍のことを調べさせているから、お前らはもう帰っていいぞ」

部長の一声で、今日の相談部は解散となった。

帰り道。

僕はいつも通り、一人で寂しく帰っていました。

実際、僕に同学年の友達なんて居ないからね。

悠だっって直ぐ帰っちゃうから、いつも一人になるわけです。

「はぁ…」

僕が憂鬱な考えを張り巡らしていると、目の前に見覚えのある顔を見つけた。

「あ…錦君だ」

先程、部長に顔写真を見せられたのが幸이었다。

僕、人から避けられすぎて、顔見れないからね。

さて、例の錦君を見つけたのはいいが、

「彼女持ちじゃないか…」

彼の隣には、うちの学校の、多分先輩の女の人が居た。

高校生男女が一緒に下校道を一緒に帰るんだ。彼女と言って差し支

えないだろう。

本当に、忌々しい。僕の下校が、さらに虚しくなってしまうんじゃないか。

僕が二人に憎しみの目を向けていると、その二人は視線から逃げるように、河原を降りていった。

そしてそのまま、二人は河に掛かった大橋の支柱の下へ。

え？なに？

これ？

アレなの？

僕は二人を追う。ストーキングは得意なんだ。

二人が入っていった、支柱付近に到着すると、河のせせらぎに隠れて、

「ん……先輩」

「滓君……はあ……」

……僕は聞いてはいけないものを聞いてしまった。

僕の中に【見たい】という、知的好奇心できな衝動が沸き上がるが、抑える。

あくまで、下心なしで知的好奇心で見たいんだけど、見たら「交ぜて！」をしそうだから止めておく。そろそろ死ぬ。

支柱の暗がりからは、ぴちゃぴちゃと淫靡な音が聞こえてくる。

きゃー、やめて！僕のライフはもうゼロだ！

そんな心の声は届くはずもなく、ただ二人は、隠微に淫靡している。途中聞こえてくる、熱っぽい女の人の声はなんなの！？

錦君、外でヤッテナイヨネ？

しかし、僕には確かめる勇気もなく。

仕方ないから、河原を上がって、帰り道に戻る。

「――これで、相談終了なのかな」

今日分かった事としては、錦君に彼女がいるということ。

で、恋路さんは、錦君への恋慕をどうにかしたい。

ということは、恋路さんを慰めるのかな？

∴
∴
∴
。

いや、無理だろう。

あの変態たちにそんなこと出来たら、そもそもまず変態じゃない。
どちらかというと、

— 錦君と、あの女の人を別れさせるだろう《……………》。

「ああ、もう！！悠を抱きしめたい！！」

むしろくしゃするので、早く家に帰って、可愛い可愛い悠を抱きしめよう。

従姉妹パワー充電しよう。

そうと決まったら、ダッシュだ。

僕は、従姉弟が大好きだ！！

家に帰ったら、

『宗へ

私達三人は、ちょっと旅行に行ってきます。

別に宗をのけ者にしたわけじゃないです。

ただ、一家で一番信頼できる宗に留守番を頼むことに決めました。

お土産も買ったたら、宗が悔しい思いをするので、買ってきません。

三日ほどしたら帰りますので、それまで、どうにか過ごしてください。

PS、

宗も、旅行に行くといいと思います。

外を知り、早く巣立ちしてくださいね。期待しています。
母さんより』

なんて手紙が、玄関の前に置いてあった。
ばかやろう。泣くぞ。

依頼一2一（後書き）

さくしゅのあとがき
消えた分の話、復興しました。
もう死ぬ。本当死ぬ。

死なないですよ？

ストーキングっ！

相談部に恋路さんが来た翌日。

部室で、黒井さんが、錦君について調べたことを発表していた。

「錦^{にしき}君。身長体重それぞれ176、56。交際経験豊富で、今はフリー」

その後もつらつらと、黒井さんは錦君について調べた事を言う。怖いな、この人の情報網。

だが、

「黒井さん。錦君には彼女いますよ？」

「え？横島君、なんで？」

「いや、昨日偶然、帰り道で錦君を発見しまして。横に女の人がい
たから、てっきり彼女かと」

「兄妹とかの可能性は？」

「いえ、河の橋の下で、大人の階段昇ってましたし」
どうにも噛み合わない。

昨日の女の人は、彼女じゃないなら、誰なんだ？

「：横島氏。話を続けろ」

部長の命令口調に、僕の脳髓は反応しちゃうんですううう！

じゃなくて、部長の命令に、ご主人様ああああ！

じゃなくて！部長の言葉に、僕は恐る恐る答える。

これは、錦君の秘密なんじゃないか？

まあ、言うけどね。この一週間で学んだ事は、僕は部長の命令を基
本的に、断れないということだ。

逆らったら、南先輩レベルまで調教されそうで怖いんだよね。

「いや、僕が言ったことが全てですけど。錦君も野外プレイとかす
るんだなあ、と」

外でのプレイは、SMの基本だよ。

あと、南先輩。僕に期待を込めた目を向けないで。

僕もどちらかというともMだよ。

「：横島君はいつでもどこでも、常時変態だねえ」

三富士が怠そうに僕に言う。

怠いんだったら、わざわざ変態言わないで欲しい。

これ昨日も言ったよね。

「ふむ。どうやら今回は、黒井の情報が役に立たないようだな」

「かなあ。俺は基本人づてだからね。……そういえば、横島君。君
ストーリーキング得意じゃなかった？」

黒井さんが僕の方を見る。

なんで知ってるんだ！？

「すごいよねえ。地元の小学生を尾行するなんて。変態極まりない
よね」

「ちょ……！なんで知ってるんですか！」

「：本当に、尾行してたんだ。冗談のつもりだったんだけど」

「横島君は、結局変態なんすね」

違う！

帰り道が同じだったただけだ！

「じゃあ、横島氏。君が錦滓について調べてくれ。見つかったら逃
げろ。いざとなったら不二を呼べ」

部長の絶対命令により、僕の役職が決まった。

男をストーリーキングする男とか、もう洒落にならない。

放課後。

僕は2・Dへ向かっていた。勿論、錦滓の尾行のためだ。

「畜生。こんな事するくらいなら、陸上部見学に行くよ……」

陸上部はいい。

僕を裏切らず、いつまでもスパッツで居てくれる。

僕が、遠いグラウンドの方を見ていたら、D組から、彼が出てきた。錦君だ。

僕は、自分の携帯から、部長へと電話をかける。

今回の尾行は、あったこと全て報告するので、結局電話が一番なのだ。

「部長。錦君を見つけました。尾行します」

『ああ、見つかるなよ』

僕の耳元から、くぐもった部長の声が聞こえる。

本来なら、それだけでも興奮してしまうが、抑える。

「錦君一階におりました」

『そういうどうでもいいのはいい』

「錦君、家に帰るでしょう」

『お前にとっては、錦萍の行動はどうでもいいだろうけど、ちゃんとやれ』

分かっているなら、尾行なんてさせないで欲しい。

「依然、錦君には動きありません。…と、思ったら、グラウンドの方へ向かいました。どーぞ」

『そうか。錦萍はバスケ部じゃなかったか？どーぞ』

部長って、案外ノリいいんだな。

どーぞが返されたの初めてだよ。

というか、同じ学校の人に電話をかけるのなんて、小学校の連絡網以来だよ。

てへ。

とまあ、僕のぼっち歴史は、置いというて。

錦君はどこに向かっているんだろう。

「部長、陸上部の誘惑に勝てません。どーぞ」

『死ぬか？』

「尾行します」

スパッツで死にたくない。

スパッツなら、ブルマで死にたい。

そんな僕らのやり取りに気づかず、錦君は突き進む。

——ん？あっちゃって、女子陸上部の部室じゃないか？

更衣室じゃなく？

部室になんの用だろう。

『横島氏。大抵の人間は、更衣室より部室の方が、要件はあると思うぞ』

耳元から聞こえる部長の声。

また僕は声に出していたのか。

もう、癖だな。

本当。

「錦君が、女陸部室にはいました。どーぞ」

『窓から中覗け。どーぞ』

それやったら、僕完璧に不審者だよね。

僕は女陸部室の窓枠に手をかける。中々、カーテンの隙間がない。と、やっと隙間を見つけたとき、部室から錦君が出てきた。

「中見えませ——錦君と、女の子が出てきました。どーぞ」

『昨日の女か？どーぞ』

「違います。今日の子は貧乳です。どーぞ」

『……』

部長からの返事はなかったが、とりあえず気にしないで二人を追う。

二人は、昨日の時のように、また暗がりへと入っていった。具体的には、体育館裏。

「二人が、体育館裏に入りました。どーぞ」

『体育館裏？それはずいぶんと変なところに』

「僕の予想じゃ、錦君は、今日も大人の階段を、エスカレーターする気です」

『まあいい。これまで通り尾行しろ』

え……？ここまで来たら、もうどうしようもないでしょ……？

今日もあの謎の敗北感を、味わいそうだよ。

今日も悠を抱きしめられないよ。

……しかし命令に逆らうわけにもいかないので、物陰から様子を見る。

見なければ良かった、と公開したのは言うまでもないが。

「部長。僕、陸上部の見学行っているんですか」

『良くない。ちゃんと報告しろ』

「ねちよねちよしたキスしてます」

『女の方、誰かわかるか？』

「分かりませんけど……。あ、祐子さんですね。小泉祐子」
彼女が着ている、練習着に書いてあった。

僕、これでも目がいいんだ。

『ふむ。…黒井、小泉祐子を調べろ』

携帯から、微かに部長と、黒井さんの声が聞こえる。

くそう。こっちは言い表せないほどの敗北感を味わっているのに。

あの二人。そろそろ本気で、本番行きそうだし。

尾行とか、僕。そろそろ本気で、生徒指導室行きそうだし。

誰かに見られたら、僕完璧にアウトじゃん。

『横島氏。聞こえるか？』

「聞こえます。帰らせてください」

『帰るな。死ぬか？』

「ここに居ても死にます」

『いいから聞け。早くその二人をとめろ』

「え？なんですか？僕恋人同士の逢瀬を邪魔するのは、もう嫌なんですけど」

まあ、錦君には何かあるようだけど。

『違う。そいつらは恋人じゃない。現に』

『小泉祐子には、彼氏がいる』

カレシガイル。

カレシガエル。

グワ。

『変な現実逃避をするな！なあ、小泉祐子と、錦萍は和姦か？』

「和姦なんて使ってはいけません！下品ですわ！」

『横島氏、落ち着け。ちゃんと見ろ。小泉祐子は嫌がってないか？』

「……ッ！？」

僕は、いまだ体育館裏で、ねちよねちよしている二人を見る。

確かに、もう何分間か二人はねちよっている。それっておかしくな
いか？

それに、僕には分かる。

小泉さんが、レイプ目だということをしる！

レイプ目とは、焦点が合わない、悲壮感に溢れた目です。

詳しくはGoogleしてください。

『分かったかい？分かったなら止めるんだ。急げ。横島氏』

そういう部長の声は焦っていなかった。

多分、小泉祐子のことなどどうでもよいのだろう。

さすが相談部部長である。

「くくく。ならば全国の貧乳ファンのために、僕が一肌脱ごうじゃないか！！」

僕は物陰から出て、二人の方向へ向かう。

そう、《あの言葉》を言うために。

これで、この言葉を使うことも無くなるだろう。

だから。

最後だけ、僕に力を貸してください。

それは「こんにちわ」のように。

それは「さようなら」のように。

フランクに

フレンドリーに

ジェントルマンを気取って

優しく

元気に

全てを包み込むように。

全てを超越して。

——ふっ、まさか、こんな使い方をするとは思っていなかった。

この僕が、人のために、この言葉を言うだなんて。

さあ、覚悟を決めろ。

アイアンクロート、右ストレートに気を付けて。

いざ……ッ!!

「交ぜて！」

アイアンクロートも右ストレートも来ませんでした。
ピンタが来ました。

ストーキングっ！（後書き）

さくしゃのあとがき

ネタバレあるんで、本文を読んでからお読みください。

ただ「交ぜて！」を使わせるがため、この話を書きました。
しかし、錦君、典型的な最低野郎になりそうですね。
私のリア充へのどす黒い感情からとかじゃないです。
本当です。

さて、本編の話ですが、

この依頼、前置きが妙に長いです。

ですが、依頼解決は、実際二話位で終わると思います。
思うなので、確定はできませんが。

では、ここまで読んでくれた人に最大限の感謝を。
また後日、お会いできたらお会いしましょう。

ストーキングっー2ー(前書き)

熱出しちゃったよ。

家誰もいないんだけど、ゝゝ。

寂しいようふふうふうふう

ストーキングっー2ー

「あ、、、横島。……ごめん」

錦君の強姦事件の翌日。

僕が部室に向かうと、そこには小泉さんがいた。

「なんで、謝んのさ？僕、ビンタ……ゲフンゲフン」

嬉しかったよ。

とか言ったら、終わる。

僕のいろいろが終わる。

「私、あんたのこと勘違いしてた。助けてくれたんでしょ？」

小泉さんは頬を紅潮させ、僕に言う。

うっは。可愛い。

「くそう。錦があんな奴だったとは……。先生に」

「ああ、それは良くないよ。僕信頼されてないし、錦君はその反対だし」

「でも、悔しいし……」

「僕は悔しくないし」

「私がよ！」

僕と小泉さんがそんなやり取りをしていると、

「すいません！祐子は！？」

「浩二！」

どうやら彼氏が来たようだ。

「ありがとう、横島。……何もしてないよな」

失礼なやつめ。

お礼だけいって、帰れよ。

「彼女に聞けば？」

授業中。

数学の授業。

死ぬほど眠い。

窓から降り注ぐ、暖かい光で、より眠い。

実際、僕だけが眠いわけじゃなく、クラスの2割の人間は机に突っ伏していた。

僕から見て、右斜めの席のやつに限っては、アイマスクまで付けている。

それはギリギリアウトだろう。

カッカッ。

黒板に白いチョークが当たって、無音の教室に、軽快な音が響く。

これも、余計睡魔を際立たせるものの一つだろう。

カッカッ。

そういえば、どうして黒板は緑色なのに、黒板なんだろう。

そもそも、本当に黒い黒板を見たことがない。

どこまで行っても深緑だと思う。

そんな事をいうと、青信号も緑なのに青信号。

こういう名前を付けた人達には、僕たちとは、違う世界が見えているのかもしれない。

青りんごとか、緑なんだし、『みどりんご』でいいと思う。

みどりんご。

みどりんご。

「おい、横島。この問題といってみろ」

数学教師に当てられる。

この初老の教師は、なにかと僕を問題視してくる、面倒な奴だ。さらに、そのせいか、数学の時間になると、僕への問題出題率が

100%をぶっちぎる。

そのせいで数学の成績だけ、僕は群を抜いていた。
数学教師に生返事を返して、僕は教壇に上がる。

——しまった。

ノートに書いてあると思ったら、今日の授業分全部、林檎の絵だった。

みどりんごの逆襲だ。

「すみません。僕にだって分からないことがあります。先生が僕のことを、まるで林檎の紅の様に、情熱的に愛しているのは分かっています。林檎なんです。みどりんごなんです」
教室に小さなざわめきが生まれる。

「なんだ？ぎゃぐ？」とか「ついにイかれたか」とかそういう声が、後ろから聞こえる。

最終的なクラスの結論として、「横島は、ついにイかれた」となった。

「ついに」言うな。

「横島……？どうした？ついにイかれたか？」

先生まで言い出してしまった。

どうやら僕は、いつかイかれる人間だと思われていたらしい。

これ以上イかれると、さすがの僕もみどりんご。

え？

みどりんご？

あれ？

今、

あれ？

僕？

あ。

——僕の意識は、そこで途絶えた。

気がつくと、ところどころシミの見当たる、白い天井を見ていた。薬品の臭いが鼻につくので、保健室だろう。

なんで、ここにいるんだっけ？

確か、林檎。

りんご？え？りんご？

「あ、起きた？」

横から聞いたことのある声が掛けられる。

「あ、小泉さん。僕、なんかあったっけ？」

「…覚えてないの？あんた、倒れたんだよ？」

ああ…。

そうだ。いきなり意識が遠のいて。

消えたんだ。

「あんた、結構熱があるよ？今日休めばどうにかなると思うんだけど」

熱かあ。確かに、今日思考が冴えないなあと思ったんだよね。

全然変態発言してないし。

それを自分で言うのも、中々危ない人だなあ。

というか、最近、僕保健室に来る回数おおいなあ。意識が消えたのは、今月で二回目だし。

「それで、運んできてくれたんだ？ありがとう」

「べ：別にいいわよ。お礼よお礼。というかあなた、もう少し友達とか作ったほうがいいわよ？あなたの事誰も、触りたがらなかったわよ」

あれか、○○菌的なやつかな。

熱だから、菌じゃないんだけどね。あれ？菌なのかな？

「なんか、みんな触ったら妊娠するって言われてたし」

菌どころじゃなかった。

半端ないね、僕。

少子化対策に、僕を登用するべきだね。本当。

「じゃあ、もう戻っていいよ？戻って欲しくないけど」

「戻るわよ…。あなた、私これでも、人様の彼女なん…。あんたには関係ないのか」

小泉さんは嘆息する。

こんな優しい子を彼女に持てるなんて、こう…こう…浩二君？は幸せ者だよ。

僕がそう言っていると、彼女は顔を紅くして、出ていった。

——さて、寝るか。

もうどうしようもないくらい眠い。

なんでだろう。

なんでいきなり、熱なんて出したんだろう。

悠を抱きしめてないからかな。

いや、多分。

ストーキングっー2ー（後書き）

さくしゃのあとがき

最近、どうにか頑張っって、描写練習をしています。

ただし、実際に使えません。

あと、偉大な作家様の文を真似てみたりしました。

似ているでしょうか？

最近、文字ばかり打って、ワープロが速くなりました

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8683y/>

僕(変態)と君たち(変態)の相談部

2011年12月14日01時50分発行